『結婚の生理学』と私生活空間
―― 方法論としての生理学 ――

松　村　博　史

はじめに

1829年は、バルザックが後年『人間喜劇』に組み入れられることになる最初の二つの作品を発表した重要な年である。3月には『最後のふくろう党』が出版された。のちに『ふくろう党』と改題されるこの作品は、ウォルター・スコットの影響を受けた歴史小説であり、とりわけ作者の同時代史に関する興味を示した作品である。だがこの野心作は当時の一部の知識階級には高く評価されたものの、書店での売れ行きはかんばしくなかった。彼が広く世に知られるようになったのは12月に刊行された『結婚の生理学』によってである。しかし当時としてはベストセラーとなったこの書物は、全ての読者から歓迎されたわけではなかった。それは結婚生活を諧謔的な文体で論じ、しかも妻の姦通というテーマを大きく取り上げていることで世間に大きなショックを与えたのである。

今でさえも、『結婚の生理学』はバルザックの作品の中でも位置づけることの容易でないテクストと見なされているように思う。まずそれは小説ではなく、『ふくろう党』のようにバルザック小説の出発点として論じることも難しい。かと言って理論書でもなく、エセーと呼ぶこともできない、ある意味分類不可能なテクストである。それに他の作品に見られるバルザックの文体のイメージともかけ離れていて、その冗談めかした、揶揄に満ちた口調により、作者の目指すところを見えにくくし、読者を当惑させてしまうのである。

だが『結婚の生理学』は結婚生活とその矛盾というテーマの上でもこれ以降のバルザック作品、あるいはさらに直接的には『私生活情景』の作品群につながるものである。またそれと同時に、バルザックはここで自らの小説の方法論を確立したという点が重要であると思われる。19世紀フランス社会における結婚と夫婦生活というテーマをどのような視点において捉え、描き出すか、そのテーマの扱い方に関して、バルザックはここで様々な角度からの試行錯誤を繰り返し、とりわけ当時の生理学の視点を取り込みながら自らの方法論を確立していった。本論ではとくに後者の問題を対象として検討していきたい。

この作品については、すでに私自身バルザック生誕200年記念の1999年に研究発表を行い、「『結婚の生理学』の教えるもの――夫婦生活と病理学」というタイトルで記念論文集にも掲載している[1)]。そこでは『結婚の生理学』のテクストと19世紀初頭のさまざまな医学的テクストを比

較して分析を行った。それ以降もバルザックと医学というテーマに沿って研究を続けているので、本論でも異なる主張を展開するわけではなく、むしろ内容の重なるところも多いのだが、ここでは前の論文では十分に論じられなかった作品の内部分析を、より多くの引用を踏まえながら詳細に行いたいと考えている。とくに『結婚の生理学』における私生活の「空間性」と解剖学的視点の関わりについて考察し、作品の分析を少しでも遠くまで推し進めたいというのが今回の趣旨である。

1．私生活空間の発見

バルザックが青年期における暗黒小説や歴史小説の模倣的な試みから脱し、のちに『人間喜劇』に収録される作品を書き出そうとしているこの時期において、「私生活」の発見が小説の方法を開発する上で決定的な役割を果たしているように思われる。そして「私生活」を観察し描写していくための方法的枠組みを提供したのが、この1820年代から30年代における医学・生理学のあり方ではないかというのが、本論考における作業仮説である。

すなわち、この時代の医学が解剖的手法によって身体内部の空間を探求していったように、バルザックによる夫婦生活の生理学は、私生活という空間を解剖的な視線によって探っていくことをその方法として確立したのではないか。ここで医学的観察の対象とされる身体内部の空間と、文学において追究されるべき私生活空間とは、まず一つには外側から窺うことのできない、秘められた場所であること、もう一つにはそれぞれが内部に病んだ部分を抱えていることを共通点としている。解明すべき空間を構築しつつ、内部の病患をその領域の中で特定していくこと、それが19世紀前半の病理解剖の医学と、バルザックの文学に共通する方法論であると言うことができる。今回の分析では、バルザックがこうした方法をいかにして『結婚の生理学』という作品の内部に取り入れ、夫婦を核とする私生活の観察に適用しているかを見ていきたい。

まず『結婚の生理学』において、私生活がいかに「空間」として把握されているかを見ていくことにする。この作品の目指すところは、19世紀前半のフランス社会において、ある程度以上裕福な階級の結婚生活が置かれている危機的状況を明らかにすることにある。そのような夫婦は、表面上は何の問題もないように見えても、実際には妻と夫との関係が揺らぎ始めている。それをバルザックは次のように表現する。ここで作者は読者に語りかけている。

> 人はこうした結婚生活の状態に段階的に、気付かぬうちに至るのである。多くの夫は一生の間、自らそれと知ることなく家庭内において死ぬまで不幸でありつづける。この家庭内革命はつねに確実な規則に従って起きる。というのは蜜月の移ろいは空の月の満ち欠けと同じく確かなものであり、全ての家庭に当てはまるからである。(EO, p.88 ; Pl., t.XI, p.987) [2)]

この引用で「家庭内において不幸」と訳出した箇所は、原文ではmalheureux dans votre intérieurとなっているが、このintérieurの語は「家庭内」と解釈すべきであろう。バルザックはこうした

言い方を繰り返し使っており、この引用のすぐ手前でも「立派ではあるが家庭内では不幸」(*ibid.*)だという人物が出てくるし、少しあとにも「家庭内で幸せであるために、社交界にも出て行かない」(p.92 ; p.990) というような一節が見られる。ここで「内部」を設定することは、すなわち「内部」と「外部」を区別することであり、家庭を空間的なものとして把握することであると考えられる。

もちろん、バルザックだけがintérieurの語を「家庭の内部」の意味で使っているわけではないが、それ以前の文学においては、この語は主に「個人の内面」を指し示していた。しかし、スイユ社から出ている『私生活の歴史』にも書かれているように、この語は19世紀の間に次第に個人の内面の意味から、「家の内部」を表すことが多くなったのである[3]。これはバルザックの発明ではないかも知れないが、彼がこうした見方の形成において大きな位置を占めている、あるいは少なくともその一端に貢献していると言うことはできそうである。表向きの立派さと家庭内の不幸とを対比させる表現が示すように、私生活の内部は何が起こっているのか外部の人間には窺えないような、隠された空間であることも、ここでは示唆されている。

ここでもう一つ注目したいのは、引用の最後にあるménageという言葉である。この語を辞書で引くと、通常「夫婦、世帯」という訳語が当てられているが、バルザックはこれに空間的な奥行きを与えているので、ここでは「家庭」と訳すことにする[4]。この語はとくに『私生活情景』前後の作品におけるキーワードの一つとなっている。バルザックは他の作品においても「家庭の内部 (l'intérieur d'un ménage)」というような言葉を好んで使用するが、こうした使い方がその何よりの証拠となるだろう。

このménageを分析の対象として捉え、これを「解剖する」ことを小説の方法として採用したのはバルザックの非常に独創的なところであろう。18世紀以前の文学においても「解剖」の概念を比喩的に使う例は見られるが、それは多くの場合個人の心理に適用されている[5]。しかしバルザックは個人の内面ではなく、妻と夫との関係性を彼の生理学の対象とするのである。関係として捉えられることによって、いわばビシャの一般解剖学において身体空間が諸器官の間の、あるいは幾種類かの組織の間の関係によって定義されるように、私生活空間もまた観察によって探求していくべき奥行きを持つことになる。このように空間として捉えられたménageが、バルザックの「生理学」の出発点となるのである。「一つの家庭が多かれ少なかれ、一定期間とどまるこうした状況がこの著作の出発点であり、全体的な観察の帰結点となるであろう」(p.90 ; p.988) とバルザックは述べている。「こうした状況」とは蜜月が終わり、結婚生活の危機を示す初期症状が表れ始める時期を指す。

> こうした場合に、妻に認められる最初の診断は非常な突飛さということである。妻は彼女自身から逃れ、家庭内を避けることを好むようになるが、それはまだ完全に不幸になった夫婦のような貪欲さを伴うものではない。(p.93 ; p.991)

彼女は外に出ると夫の自尊心を満足させるためと言いつつ服装にひどく気を遣うようになり、

「退屈な家の中に戻ると、あなた[=夫]は彼女が時には暗く物思いにふけっているのを認めるようになる」(*ibid.*) という。ここから夫婦の対外的な姿と「家庭内」「家」とが対比され、外からは窺えない家庭内部の事情、まさに「私生活」が描かれるのである。

私生活空間は『結婚の生理学』の第1部において、このように妻と夫との関係性において定義されるが、それは本書を通して少しずつ具体的な空間として構築されていく。第2部は「家庭内外における防衛手段について (Des moyens de défense à l'intérieur et à l'extérieur)」と題されており、家庭の内と外が截然と区別されている。ここでは家庭は外敵から守るべき空間として表象されているのである。またこうした空間としての私生活のあり方が、文明の発達と関連づけて位置づけられている次のような引用も見られる。

> 文明の到来とともに、百万人の人間が2里四方[6]の場所 [=パリ] に閉じこめられることになった。そして人々は通りに、家の中に、アパルトマンに、寝室に、そして1平方メートル足らず[7]の小部屋に押し込められることになったのである。もう少しすれば、小型望遠鏡の筒のように一人の人間が他の人間の中に収まるようになるかも知れない。そこから、あるいは経済上の理由や、恐怖や、見当違いの嫉妬など他の多くの理由から、夫婦がともに暮らすという習慣が始まったのである。(p.185 ; p.1066-7) [2]

こうして私生活は『結婚の生理学』の省察[8]を追うに従って空間として形成されていき、夫婦とくに夫にとって自ら守るべき領域となると同時に、解剖的観察によって探るべき内部として立ち現れてくる。省察14は「アパルトマンについて」と題され、夫婦の生活空間としてのアパルトマンの構成に充てられている。

> あなたの家やアパルトマンの配置に関する全てのことは、あなたの妻があなたをミノタウロスの犠牲にする決断をした場合であっても、そのいかなる手段をも与えないという考えに基づいて構想されなくてはならない。というのも、不幸のうちの半分はアパルトマンがその容易な手段を提供しているという嘆かわしい事実によってもたらされるからである。(p.152 ; pp.1038-9)

まず夫婦の家は他から切り離された、独立した空間でなくてはならない。ここでは夫婦の関係に問題が生じるのを防ぐための防衛手段の話をしているが、それは同時に夫婦のドラマの舞台となる空間を創造することである。その空間はまた、あらゆる危機の可能性にさらされる場でもある。

> もしあなたの家が中庭と庭とにはさまれ、他のいかなる家とも接触がないように建てられているのでなければ、それは何の役にも立たない。まず応接用のアパルトマンからはいかなる小さな窪みもなくさねばならない。たとえ6個のジャムの瓶しか入らないような戸棚であろうとも、壁で塗り込めてしまうべきである。あなたは戦争に備えているのだ。そして将軍が最初に考えることは、敵の兵糧を断つことなのである。(p.153 ; p.1039)

こうして、私生活の空間をいかにして外敵から守るかということに重点が置かれる。すなわち、「ほとんどの情事は入ることと出ることに集約される」(*ibid.*) のであるから、門番には独り者で献身的な人物を選ぶべきこと、とりわけ妻のアパルトマンには細心の注意を払うことなどである。作者は続いて次のように言う。

> 出入りに関しては妥協してはならない。妻の寝室は応接用アパルトマンの続きに設置すべきであり、出口は応接室に面したものしか認めてはならない。これは妻の部屋に出入りする者を一目で看取することができるようにするためである。(*ibid.*)

他にも、化粧室、浴室、小間使いの部屋などは、策略に利用されないように妻のアパルトマンよりも上の階に作るべきであるとか、あるいは「ベッドは要となる家具の一つであり、その構造は時間を掛けて熟考しなければならない。そこではすべてがこの上なく重要な関心事となる。[.....] ベッドは結婚の全てである」(p.154 ; pp.1040-1) というような主張も見られる。

さらに後者の問題については、バルザックは省察17「ベッドの理論」においてこれを独立して取り上げ、夫婦のベッドの配置を「1° ツインベッド　2° 別々の2つの寝室　3° 一つの同じベッド」(p.182 ; p.1064) のように分類し、それぞれの場合に起こりうる事態を詳細に分析している。その上で3番目のただ一つのベッドで寝ることが他の2つの方法よりも勝っている (p.202 ; p.1081) と結論づけるのである。

これらはいずれも結婚生活が抱えうる危険を回避する防衛手段とされているが、それは同時に夫婦の私生活空間の克明な描写になっていることを見落としてはならない。そこは夫婦の関係を巡ってあらゆるドラマが展開される場所となるのである。これ以降のバルザックの小説につながる多くの種がそこに播かれていると言ってよい。全体にわたってちりばめられた結婚にまつわるさまざまなエピソードもそうだが、結婚初期の蜜月の時期から最初の徴候への移行、妻が小説を読み始めることについて、そして妻の愛人となる男が家庭を訪ねてくる瞬間など、ここでは夫婦の家庭という私生活空間の周辺で、さまざまなドラマの筋書きがそこで試されているのだ。そして作者自身も、これら夫婦に関する一連の観察を、「実験室」と称しているのである (p.338 ; p.1189) [9]。

『結婚の生理学』において、省察14「アパルトマンについて」に続く省察15は「税関について」と題され、家庭に出入りする人物や物を注意深く観察することが述べられるのだが、ここでは夫婦の私生活が国家に喩えられている。こうした比喩は省察16「夫婦憲章」、省察20「警察論」、さらには第3部の全体が「内戦について」と題されているところにも続いていくのだが、本論ではこれらの政治的な比喩について深く立ち入ることはしない。ここではそうした比喩も私生活を空間的に把握することと関連していることを指摘しておけば十分だろう。

ところで、このような私生活空間の把握の仕方、空間としての私生活の捉え方は、有名な迷宮とミノタウロスの比喩と切り離すことはできない。これからこの問題について考えていくために、この部分の最後にその一節を引用しておくことにする。バルザックが初版に先立つ1826年に、当

時彼自身が経営していた印刷所で印刷したとされる『結婚の生理学』プレオリジナル版では、作品の冒頭に置かれていた一節である[10]。

> 法学士で、『神話事典』を著した古典研究者のションプレ氏によれば、ラビュリントス（迷路、迷宮）とは「木々が植えられ、建物が巧妙に配置された囲い地のことで、一度若者がそこに足を踏み入れると二度と出口を見つけることができない」場所であるという。ところどころに花の咲いた植え込みが見受けらるが、あらゆる方向に入り組んですべて同じように見える無数の通路のただ中、茨の茂みや、岩山や、棘のある木々の間で、受刑者はミノタウロスという名の獣と闘わなければならないのだ。(p.86；pp.985-6)

ミノタウロスは知られている通り人間の体と牡牛の頭を持つ怪物だが、それは「神話に登場する角のある獣の中でも最も危険なものであり、アテネ人はそれが及ぼす危害を免れるために、豊作の年も不作の年も50人の処女を捧げることを取り決めた」(pp.86-87；p.986) ほどである。ラビュリントスは「善良なションプレ氏」(p.87；p.986) の考えるようなイギリス式庭園などではなく、「結婚がはらむ危険の巧妙なアレゴリーであり、その忠実で恐ろしいイメージ」(*ibid.*) であるという。この比喩からは、バルザックが夫婦により構成される私生活空間をどう捉えていたかがよく理解できる。これからの分析の中でそれを順次解明していくことにしたい。

2．解剖学と身体空間

どうして私生活を空間として捉える見方が、バルザックの小説手法を考える上で重要な意味を持つのだろうか。それは19世紀初頭における生理学自体が本質的に空間的で、共時的な学問であると考えられるからである。従ってバルザックが小説の中で私生活を空間的に捉えて描写していくことによって同時代を描くという小説の方法は、まさに当時の生理学の考え方と共通しており、それゆえバルザックは「生理学」を同時代を描くための方法論として取り入れたと考えることができるのである。

この時代の医学・生理学は病理解剖学の発達によって大きく枠組みが変わることになった。当時の医学・生理学と『結婚の生理学』との比較は、私自身1999年の研究ですでに扱っているので、ここでは医学的な説明に深く踏み込むつもりはないが、病気で死んだ人間の体を解剖して分析することによって、身体内部の仕組みがより明らかになり、体の外側に現れた症候を、身体内部の病変に関連づけて考えるようになったのである。当時の代表的な医者であるビシャは『一般解剖学　その生理学と医学への応用』(1801) の中で次のように述べている。

> われわれは病理解剖学が新たな飛躍を遂げるべき時代にいるように思われる。この科学は慢性病において原因あるいは結果として緩慢に顕れる器官の不具合のみを扱うものではなく、病気のどの段階であれ、身体の各部分が被る病変についての検討から構成されるのである[11]。

こうした考え方から、病理解剖によって明らかになる「器官が被る病変の検討」を、病人における外的な症候の「厳密な観察」に結びつけることによって、初めて科学的な病気の診断ができる（*ibid.*, p.xcix）とするのである。そこから「もし病気の座がわからないのならば、観察など何になるだろうか」（*ibid.*）というように、「病気の座（le siège du mal）」を知ることの重要性が強調される。一方『結婚の生理学』の中のあるエピソードにおいても、医者の登場人物が次のような言葉で患者の容態を説明している箇所がある。

> 病気の容態について奥様を脅かすつもりはないのですが、もし奥様の健康を大切に思われるのなら、完全な安静状態を保たれることをお勧めします。今のところ、炎症は肺に向かっており、私どもの思惑通りに進んでおりますが、非常に安静に保たなければなりません。というのは、少しの興奮でも病気の座を他へ転移させてしまう恐れがあるからです。（p.303 ; p.1159）

これもバルザックの時代が同じ医学の枠の中にあり、当時の医者たちがビシャと同じ言語を使って病気を語っていたことを証明するものだろう。

さらにビシャは、何年もの間数々の病人の側らでノートを取り続けても、病気の症候について漠然とした観念しか得られないとし、実地に解剖を経験することの重要性を強調して、次のように言うのである。

> いくつかの遺体を解剖してみるがいい。そうすれば単なる観察では追いやることができなかった暗闇が直ちに消滅するのがわかるだろう。（*op.cit.*, p.xcix）

また、バルザックの『結婚の生理学』においても、結婚についての研究が新しい学問であり、「結婚は科学である」として、次のように断言している。

> 男はまず解剖学を研究し、少なくとも一人の女を解剖することなしに結婚してはならない。（p.56 ; p.958）

この引用の原文で「解剖学」はanatomie、「解剖する」はdisséquerの語が使われているが、dissectionはこの時代の医学研究においても広く行われるようになった「死後解剖」のことを指している。こうして並べてみると、二つの引用が同じ視点を共有していることは明らかだろう。

さらに、ここで言う「解剖」とは、単に研究対象である身体を解剖してその内部構造を分析し理解するというのにとどまらない。ここで表明されている考え方はまさに「病理解剖」であって、対象の病的な部分を解剖によって突きとめるという考え方に基づいている。上のバルザックの引用では、解剖するのは女性の内面であると解釈できるが、『結婚の生理学』において女性すなわち妻の内面を見抜くことは、つねに結婚生活、あるいはこの時代における結婚制度の病原を突き

とめることと並行しているのである。

『結婚の生理学』においては、19世紀前半における結婚制度、あるいは個々の結婚生活が病んだ状態にあることが示唆され、それを観察することが解剖の比喩を使って語られていく。バルザックによれば、この時代のフランスでは「結婚した女性が貞節でいつづけることはほとんど不可能」であり、この状態は「隠された病」であるとする。

> こうして、社会を蝕んでいる隠された病を何はばかることなく暴いたあとで、われわれはその原因を法律の不完全さや、風俗の無節操さや、識者たちの無能さや、われわれの慣習の矛盾に求めてきた。観察すべき今ひとつの事実は、この病弊の広がりということである。(p.76 ; p.976)

この引用の最後は原文ではl'invasion du malであるが、この部分まで病気の喩えを持ち込んで、病気が蔓延するイメージで捉えることは十分可能だろう。また結婚の問題点は一度ならず「傷(plaie)」「社会の傷 (plaie sociale)」 (pp.42 (946), 71 (972), 73 (974) 、あるいは「社会的瘰癧(écrouelles sociales)」(p.xxii ; p.911) というような言葉で表現されている。『結婚の生理学』が明らかにしようとしているのは「巨大な社会の傷」(p.42 ; p.946) であって、それは突き詰めれば「社会秩序の構造上の欠陥」(p.41; p.945) に他ならない。『バルザックにおける結婚 —愛とフェミニスム—』を書いたアルレット・ミシェルによれば、こうした欠陥のもとは「法律と風俗の間の根深い不和」[12] から生じるのであり、「男性による男性のための社会の横暴さと偽善」(*ibid.*, p.97) によりさらに深刻になっているという。こうしたことが『結婚の生理学』において「病気」のメタファーで語られるのである。また次の引用のように、本書は結婚という病気についての個別研究論文 (monographie) であると述べているところもある。

> 人が結婚について語るのは、ただ冗談を言うためでしかないのだろうか。われわれが結婚を誰もがかかる軽い病気と見なしており、この本はその個別研究論文であるということをわかっていただけないものか。(p.11 ; p.920)

また解剖学の比喩は、例えば次のような引用にうかがうことができる。

> 社会秩序は劇の上演の時に銃声が聞こえないように耳を塞ぐ小さな子供のようなものであろうか。それは自らの傷を探ることを恐れているのか。あるいはこの病気は治療法がないことがすでに周知の事実とされており、成り行きに任せておくしかないというのか。(p.43 ; p.947)

これに先立つ部分では、「数多くの医者たちが結婚を外科学や医学との関係において論じた数多くの本を著してきた」(p.6 ; p.915) のであり、「昔の医者たちはメスを手に取って[結婚の]あらゆる傷口をなぞってきた」(*ibid.*) とも書かれている。また次の引用では、作者自身が自らを社会の病弊をメスで暴く外科医のイメージで捉えている。

これまでの省察において、われわれは恥ずべき傷が隠れている見せかけの組織を切り開く外科医の不適な大胆さをもって、病弊の広がりを暴いてきた。公共の美徳などは、われわれの解剖室[13]の台上に持ち込まれれば、メスの下に死体も何も残らないのである。(p.53 ; p.955-6)

こうした引用を挙げ始めると切りがないので、このくらいで止めておくが、バルザックの病理解剖学的な見方を最もよく表すのが「症候（symptôme)」という言葉である[14]。『結婚の生理学』においては、幸福な結婚生活が危機に陥りつつあることを表すさまざまな徴候のことをsymptômeという言葉で表しており、前半の省察8は「初期の症候（初期症状)」、末尾に近い省察27は「末期の症候（末期症状)」と題されている。

ハネムーン（蜜月）の幸せな時期を過ぎると、妻は次第に結婚生活に幸福を見いだせないようになり、姦通に心が傾くようになる。そうした推移を示す各段階における徴候がsymptômeである。例えば初期の症候は次のように表現されている。

かくして、いかなる愛人も姿を現さない前から、妻はいわばその正当性を論じ始める。彼女の中では妻としての義務と、法律と、宗教と、それ自ら以外に何の抑制するものも持たない自然が心の中に吹き込む秘められた欲望とが闘いを繰り広げるのである。そこで夫であるあなたにとって全く新しい局面が展開され始める。寛大で善良な母親である自然が、危険を冒そうとしている全ての者に対して発する最初の警告がそこには見出されるのだ。自然は旅人に恐れられる蛇のしっぽにガラガラをつけたのと同じように、ミノタウロスの首に鈴をつけた。こうしてあなたの妻において、初期の症候と呼ばれるものが表面化する。それを撃退することができなかった者は不幸である！　(p.89 ; p.988)

こうした症候が結婚生活における幸福の移ろいを表象する記号となる。今の引用のすぐあとでは、バルザックは次のように書いている。

知性ある人はそのときに妻が垣間見せる謎の指標、気付かないほど微かな記号、無意識の告白を見分けることができなければならない。(p.90 ; p.988)

それは確かに指標であり、記号であり、告白には違いないのだが、ここでsymptômeという言葉を使っていることは、とりわけこうした結婚の危機が「病気」として把握されていることを意味している。また前の二つの引用では、夫が妻に表れた症候を見抜くことが問題になっているが、それは同時に夫婦生活の病理を明らかにすることでもある。

妻の過ちはそのまま夫たちのエゴイスムや、無頓着さや、無能さに対する非難文書に他ならない。これまでしばしば自らの罪を他人のせいにして責めてきた読者よ、今はあなたが公正に天秤をかける時なのだ。(p.54 ; p.956)

と作者は述べ、さらに続けて「この夫婦が患っている病気の原因をさらに深く突き詰めていこうではないか」(*ibid.*) と呼びかけるのである。妻に表れた症候を解明することは、バルザックにとって私生活の典型的な形である夫婦生活あるいは家庭に潜在する病気を、解剖的手法によって明らかにすることに他ならない。

このように結婚生活の危機を「病気」として捉える方法の特徴をよく表すものとして、本論で扱える範囲は限られているが、ここでは一つの問題だけを取り上げることにしたい。それは「ミノタウロス」という象徴が持っている曖昧さについてである。

『結婚の生理学』という作品は、一般には妻の姦通を防ぐための方法を紹介した手引き書、いかに愛人となる独身者の侵入を食い止め、結婚生活の平和を守るかを解説した本と受け止められているようである。その理解の仕方から考えると、ラビュリントスに迷い込んだ者を襲うミノタウロスは、妻の姦通の相手となる「愛人」と同一化することができよう。確かにそのように解釈すると話は簡単であり、作者自身もそう理解できる書き方をしている箇所も多く見受けられる。

しかしその一方で、ミノタウロスがはっきりとした愛人の形を取って表れていないと考えられるところも多くある。例えば前に挙げた引用の中で、「妻があなたをミノタウロスの犠牲にする決断をした場合」(p.152 ; p.1039) に備えてアパルトマンの配置を考えるべきだと主張されているが、まだここでは愛人の姿は具体化していない。また他のところでは、次のように「ミノタウロスの症候 (un symptôme minotaurique)」という言葉が使われている。

> あなたの第一の、そして最も重要な義務とは、常に自分を隠すと言うことであるが、ほとんどの夫はその点において失格である。妻においてやや目立ちすぎるミノタウロスの症候を認めると、ほとんどの夫は最初に軽蔑的な不信を示すものである。(pp.116-7 ; p.1010)

これはまだ妻が愛人を作ろうとする以前の様子を表している。つまりミノタウロスはもともと結婚生活に内在するものと考えられるのである。作者も言うとおり、ミノタウロスは「愛人」を指すというよりは、結婚生活の危険を表徴する存在であり、初めからラビュリントスの中に潜伏して存在しているのだ。これも前の引用にあるように、最初の症候は「いかなる愛人も姿を現さない前から」(p.89 ; p.988) 家庭内に準備されつつあるのである。

『結婚の生理学』をよく読めば、「愛人」あるいは「姦通」自体が結婚生活の内部、すなわち夫婦の関係のあり方に原因があることが理解できる。例えば「運命づけられし者について (Des prédestinés)」と題された省察 5 からは典型的にそのことがうかがえる。

> 実験により、ある種類の人間は他の人間よりもある種の不幸に陥りやすいことが証明された。ガスコーニュ人が大げさで、パリ人が虚栄心が強いように、あるいは首の短い人が卒中の発作を起こしやすいように、ペストの一種である炭疽病に肉屋が感染しやすいように、金持ちは痛風に、貧乏人は健康になりやすいように[……]、ある種の夫たちはより不義の恋愛の犠牲になりやすいことがわかっている。彼ら

は異なる意味での特権階級なのである。(p.46 ; p.949)

この引用によれば、姦通の犠牲になるのは、夫が元来持っているある特性によるものである。妻が不義に走るのは、夫にとっては外から襲ってくる災害とのみ言い切ることはできず、その原因の一半は夫にもある。さらにここではその特性が、ある種の病気に対する「かかりやすさ」と同一視させられていることに注目すべきだろう。ここにも病気と身体の比喩が夫婦のあり方に適用されている。

それだけではなく、「愛人について」と題された省察19では、妻が姦通に走ってもその恋愛は決してうまくいかないことまで書かれている。

つまるところ、結婚している女によって引き起こされる愛情、あるいは結婚している女が感じる愛情は、世の中で最も魅力に乏しい感情である。それは女性にあっては大いなる虚栄心であり、愛人にあってはエゴイズムに過ぎない。結婚している女の愛人はあまりに多くの恩義を背負い込むために、それを返すことができる者は百年に三人もいない。男は人生の全てを愛する女のために捧げなくてはいけないことになり、結局はいつでも女を捨ててしまうことになるのである。男も女もそのようなことは承知の上で、社会の始まり以来、女はいつでも崇高であり、男はつねに恩知らずであった[15]。(p.212 ; p.1089)

さらには、こうした女性が一人の愛人しか持たないことはまれであり、女性は次々と愛人を取り替えていくらしいことまで示唆されている[16]。すなわち『結婚の生理学』に描かれる愛人とは、最初から匿名であり交換可能であるということもできるのである。言いかえれば、妻が愛人を作るのは結婚生活の内的な原因によるのであり、愛人はいわば誰でもいいということにもなるだろう。

このように見てきても、あるいは作品の中での「初期の症候」から「末期の症候」までの配置から考えても、『結婚の生理学』を特徴づけるものは妻と夫により構成される私生活空間、そのような夫婦生活が内側に抱えている病気に向けられた視線だと言うことができる。このような病気あるいは傷を観察し分析することが、バルザックにとって19世紀の社会の仕組みを解明する「生理学」となるのである。

3. 独身者の視線

これまでの部分で、ミノタウロスに関連して、妻の愛人というのは家庭が抱えている病気の具体的な表れであって、その原因は夫婦生活に内在するものであることを見てきた。しかしそれと同時に、愛人は結婚生活に外から侵入する存在であり、作中に登場するミノタウロスもしばしばそのように描かれている。そのような曖昧さは、この作品における「独身者」という言葉の曖昧さに帰することができると考えられる。『結婚の生理学』における「独身者」の位置というのは非常に大きな問題であるが、ここでは「生理学」と「私生活空間」に関わる事柄に焦点を絞って話をまとめることにしたい。

すでに知られているとおり、『結婚の生理学』においては、「独身者」が大きな役割を果たしている。1829年の初版には、作者バルザックの名前はなく、匿名の「ある若き独身者」が作者とされていた[17]。このような「独身者」は、この作品でバルザックが目指した「生理学」に関連してどのように位置づけられるべきなのだろうか。

この作品で描かれる「結婚」および「夫婦」には、妻と夫の他に最初から「独身者」が組み込まれているように見える。前半で大きな位置を占める結婚統計学においても、最初から独身者が数えられており、次のように結婚につきまとう危険が指摘されている。

> もし少なくとも3人の独身者がつけ狙っていると知ったら、あるいはもし彼らが夫のささやかな所有物にまだ損害を及ぼしていなくても、結婚したばかりの妻を当然自分のものとなる獲物としか考えていないと知ったら、いかなる夫が若くてきれいな妻の横で安らかに眠りに就くことができるだろうか。(p.40 ; p.944)

また別の箇所では、作品に含まれる省察の数々が「夫であるあなたとあなたの妻と愛人との関係および相違点をはっきりした形で示」したものである（p.210 ; p.1086）とも述べられている。バルザックの言う「結婚統計学」においては、妻と夫により構成される世帯に対し、それに倍する独身者がおり、彼らは何とか夫婦生活の中に侵入して妻をわがものにしようと企んでいることになる。ところが実際には、ここでの「独身者」の地位はバルザックの非常に意図的な選択によるものなのである。というのは、妻の姦通には独身者の他にすでに結婚している男性による不義も当然考えられるはずだが、作者は

> 道徳風俗にとって恥ずべきことに、ほとんど全員が独身者のように振るまい、心の中で秘密の情事を誇りにしているわが夫たちのことを考えるがいい。(p.37 ; p.942)

と、結婚外の情事に走る夫たちの数が現実の統計学の観点からは決して無視できないことを認めながら、こうした夫たちを最初から彼の「結婚統計学」から排除してしまっている。それはあたかも、結婚生活に闖入するのは結婚に対して明らかに異質の存在である独身者でなくてはならないかのようである。

先ほど指摘したようにミノタウロスが結婚生活に内在する病気の表れであると言うことと、独身者が妻と夫によって構成される家庭の内と外を行き来する――同時に内側であり、外側である――存在であることは、必ずしも矛盾するものではない。というのは、こうした独身者のあり方は、夫婦生活の病理を現す症候が、同時に外側からそれを観察するための視点にもなりうるということを象徴的に示していると言えるからである。

独身者は、夫婦に内在する危機につけ込んで家庭に入り込む。その意味では、彼の存在自体が夫婦の危機を指し示す指標、すなわち症候となりうる。このような見方からすれば、独身者は私生活空間の生理学において観察される対象となるだろう。しかし同時に、独身者は夫婦に表れた

最初の症候に真っ先に気付いてそれを観察する存在でもあるのだ。そのことは、次のような引用からもよく理解できる。二つの引用を挙げる。

> 独身者たちが夫婦の家庭にすき間風が吹き始める瞬間を発見する巧みさは、[蜜月の次に来る]茶色の月にさしかかった夫が自らをゆだねる無関心さにのみ引き比べることができよう。(p.92 ; pp.989-90)

> [幸福な蜜月の期間を過ぎて] あなたたち夫婦が一緒であれ、別々であれ、社交界に再び姿を現すとき、独身者たちはあなたの妻がそこに気晴らしを求めてきており、したがって家庭や夫に退屈していることを見抜くのである。(p.92 ; p.990)

この2つの引用においては、独身者の鋭い観察力が強調されていることに注目したい。ここには夫婦という私生活空間をのぞき込む、独身者の解剖的な視線を認めることができるのである。独身者の存在は夫婦という私生活空間の中に入り込んで、その危機を象徴する症候となると同時に、それを外から観察して夫婦生活に最初に表れるかすかな危機の徴候を見出す視点となるという両義性がここに認められるだろう。

このように見てくると、夫婦の危機につけ入って妻の愛人になろうとする独身者たちと、『結婚の生理学』の作者である若き独身者とのつながりがはっきりする。すなわち、こうした個々の独身者の視線を集約しているのが、『結婚の生理学』の語り手である若き生理学者に他ならないのである。語り手は、夫婦の危機の徴候をつけ狙う独身者たちとともに私生活空間を観察し、さまざまな指標を手掛かりに内部の様子を探ろうとする。彼の目はこれらの独身者たちの視線のいわば背後にあると言うことができるだろう。

『結婚の生理学』出版直後にいくつか発表された同時代の書評の中で、『メルキュール・ド・フランス』の記事[18]はバルザック自身が書いたことがほぼ確実視されている。その中で筆者は「見事なのは、運命づけられし者の目の中にあるわら屑をも見逃さない彼の洞察力である」と書いている。ここでの「彼」とは『結婚の生理学』の作者である独身者のことを指している。これなどは一瞥したところ混同してしまいそうな例であるが、夫婦の危機につけ入って妻の愛人になろうとする独身者と、夫婦生活の生理学者である独身者が、身体に表れた微かな症候を見抜く高度な観察能力を共に持ち合わせていることがよく理解できる一節である。

しかしその反面、家庭に入り込もうとする多数の独身者たちと、『結婚の生理学』の作者である若き独身者は完全に重なるわけではない。少なくとも後者の若き生理学者は、自ら妻の愛人になろうと企んでいるわけではなく、あくまでも夫婦生活に表れた危機の症候を観察し続ける存在である。『結婚の生理学』の作者と、他の多くの独身者たちを分かつものは、一つには家庭の妻を姦通に誘うという直接的な欲望に惑わされることのない総合的な視点と、そのような利害を離れて19世紀における結婚生活の病状を把握し、その悪弊を治癒しようと考える意志であろう。

語り手の目的は「巨大な社会の傷」を暴くことであり、「病弊の広がり」を推し測ることであり、さらにはそれらの患禍を和らげることにあるという。作者自身、作品の最後に近いところで

本書の目的について次のように述べている。

> もし今完成した書物が、われわれの風俗習慣や偏見が引き起こす過ちや不条理さを暴くことによって、最悪の結婚制度の弊害を減少させるのを目的としているならば、それは最も高貴な本の一つに数えられるべきであり、その作者は人類の恩人に数えることができるであろう。(p.352 ; p.1200)

『結婚の生理学』という書物が、19世紀の結婚制度の弊害を改善する効果があるかどうかはともかく、作者の目的がとりわけ結婚制度の病弊についての現状分析にある[19]ことは確かであろう。「本書を書いたのは、結婚に賛成するためでも反対するためでもない。ただあなたに対して最も正確な描写を伝えようとしただけだ」(p.353 ; p.1201) と作者は理想の読者に対して語りかけている。私生活空間に解剖的な視線を向け、そこに見られる病気とその症候を観察し描写してみせること、それが「結婚の生理学者」の目的とするところなのである。

おわりに

「この科学と冗談との軽薄な原則」(p.14 ; p.904) と、作者は作品に込められた思想を特徴づけている。『結婚の生理学』は、最初から最後まで皮肉と揶揄に満ちた作品であり、そこから真面目な主張を取り出そうとする読者を惑わせる。例のふざけた口調を読者はどこまでまともに取り合えばいいのか。それに対し「この本が真面目な理論書であるか、機知の濫用であるかはさして重要ではない」[20]と『メルキュール・ド・フランス』の書評子は言う。「ここには誇張のただ中に真実があり、軽薄さの見せかけの中に深遠さが」(*ibid.*) ある、と。前述したように、書評の筆者は恐らく『結婚の生理学』の作者自身である。

「人が結婚について語るのは、ただ冗談を言うためでしかないのだろうか」(p.11 ; p.920) と『結婚の生理学』の作者は問いかける[21]。世間は結婚という語り古されたテーマについて、今さら正面から取り組もうとはしない。だがこの書物は結婚という病気についての研究論文であり、そこに含まれる観察は「結婚は片手間に過ぎないという、浅薄な人々が抱いている偏見を打ち砕く性質のものである」(p.253 ; p.1120) と作者は言うのである。さらにそこでは、「手法の独創性がありふれた主題を補っている」と書評の文章は主張する。

バルザックはここで、結婚を語るのに最もふさわしい文体を見出したのである。その機知の鋭さと企ての大胆さは、ブリヤ=サヴァランの『味覚の生理学』のそれに呼応する。したがって読者に必要なのは、作者の軽口に徹底して付き沿い、彼の企図をその奥から探り出すことであろう。そうすれば『結婚の生理学』とこれから書かれるであろう『人間喜劇』の多くの作品をつなぐ糸が見えてくるに違いない。それは結婚と夫婦生活とを観察して語る新しい方法、私生活の「生理学」の創出に関わっているのである。

注

1）「『結婚の生理学』の教えるもの —夫婦生活と病理学—」、『バルザック　生誕200年記念論文集』、日本バルザック研究会編、駿河台出版社、1999, pp.271-284. 研究発表は1999年5月29日に神奈川大で行っている。

2）この論文において『結婚の生理学』からの引用は全て1829年初版のテクストを収録した*Physiologie du mariage,* édition établie et présentée par Andrew Oliver, Toronto, Éditions de l'Originale, coll. « Les romans de Balzac » により、ページ数のみを示す。また参照の便宜のため、この版からの引用ページ数のあとには、プレイヤッド版（*Physiologie du mariage,* texte présenté par Arlette Michel, établi et annoté par René Guise, in *La Comédie humaine,* Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t.XI, 1980）の対応するページを示している。なお、本論考中の引用文は全て筆者による拙訳である。

3）「19世紀になると、家は家族の問題となり、生存の場であり、集合場所となる。それは夫婦の野望を体現し、成功の象徴となる。家庭を築くということは家に住むということであり、若夫婦は次第に父母との同居に我慢ができなくなるのである。[.....] 内部という語はこれ以降人の心よりは家の中心部を指すようになるのだが、それは幸福の条件となり、快適さとはいい暮らしがもたらす快適さを表すようになる」（*Histoire de la vie privée,* t.4, De la Révolution à la Grande Guerre, 1987 et 1999 (coll. Points Histoire), t.4, p.284）。

4）もともとménageは語源的にはmaisonと同じく、「家」を意味するラテン語のmansioに関連しており、古くは「家、屋内」の意味で使われていた。Cf. *Le Petit Robert de la langue française 2007.* アルレット・ミシェルはプレイヤッド版『結婚の生理学』の序文の中で、次のように書いている。「バルザックが観察する家族という単位（cellule familiale）は限定された単位であり、『結婚の生理学』は家族が近代的な広がりと意味を持つ歴史的瞬間を固定する」と。それは「狭小な、夫婦により構成される家族」のことを指している。Cf. A. Michel, « Introduction » à la *Physiologie du mariage,* Bibl. de la Pléiade, *op.cit.,* p.883.

5）18世紀以前の文学においても、「心の解剖」あるいは「情念の解剖」などの表現がよく見られる。例えばセヴィニエ夫人の「これらの方々によってほど巧みに人間の心が解剖されたことはなかった」というような一文が、リトレの辞書にも引用されている（Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française,* t.I, « anatomiser »の項目）。

6）原文では「4平方リュー（quatre lieues carrées）」となっている。リュー（lieue）は昔の長さの単位で、4.445kmに相当する。

7）原文では「8平方ピエ（huit pieds carrés）」。ピエ（pied）も昔の長さの単位で、0.3248m。上の「4平方リュー」とともに、多少の誤差はあるが、日本人にイメージしやすい訳語に置き換えた。

8）『結婚の生理学』は全部で30の「省察（Méditation）」から成る。こうした構成はもちろんデカルトなどの哲学書の様式を踏まえたものだが、「結婚統計学」「淑女について」「蜜月について」などのように、そのような哲学書のパロディと言えるようなタイトルをつけている点では、ブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』の直接の影響を受けていると言えるだろう。

9）『結婚の生理学』の最後に近い箇所（省察29）で、「私は実験室をあとにしてパリの街に繰り出した」（p.338 ; p.1189）とある。

10) La *Physiologie du mariage* pré-originale (1826), texte inédit présenté par Maurice Bardèche, Droz, 1940, pp.69-70.

11) Xavier Bichat, *Anatomie générale appliquée à la physiologie et à la médecine,* 1801, t.I, p.xcix.

12) Arlette Michel, *Le Mariage chez Honoré de Balzac : amour et féminisme,* Les Belles Lettres, 1978, p.82.

13) 原文はnotre amphithéâtreで、半円形の階段教室のことを指す。当時医学部のこうした教室において、しばしば死体解剖の公開実験が行われた。

14) symptômeについては、「症状」あるいは「徴候」などの訳語が当てられるが、ここでは病気を表象する記号であること、そして病気や医学と関わりがあることを明確にするために、「症候」の語を用いることにする。

15) この引用に描かれたような女性の姿を典型的に示す作品として『捨てられた女』が挙げられる。A. ミシェルの言うように、姦通における女の崇高さは1832年以降におけるバルザック作品の主要テーマの一つになっていく。「小説家は自らの創造物である女性たちに魅せられて、彼の結婚神話の中心となる肖像を作り出す。それは人生の詩的絶頂にあり、三十歳にして残忍とまでは言えないまでも凡庸な夫と理想的幸福の幻の間に揺れる、『完璧なる』女性である」(A.Michel, *Le Mariage chez Honoré de Balzac, op.cit.*, p.101)。

16) 「品行方正な妻が一人の愛人しか持たなかったということはめったにな」く、「変わらぬ愛情が10年も続く愛人もめったにいない」(p.331 ; p.1183) とバルザックは書いている。

17) 1829年初版のタイトルは、*Physiologie du mariage ou Méditations de philosophie éclectique sur le bonheur et le malheur conjugal. Publiées par un jeune célibataire.* となっていた。Cf. « Notes et variantes » pour la *Physiologie du mariage,* édition de la Pléiade, *op.cit.*, p.1763. またÉditions de l'Originale版のタイトルページも参照。

18) Le compte-rendu de la *Physiologie du mariage,* in *Mercure de France au XIXe siècle,* t.28, 1830. この書評はプレイヤッド版にも引用されている (*op.cit.*, pp.1760-62)。

19) 医学史的な見方からは、この当時の病理解剖学を中心とする医学は、人体とその病気の仕組みについての知識を著しく進展させ、医学的診断をより精密なものにしたが、それが直接病気の予防や治療に結びついたわけではないという。死亡率の減少や平均寿命の増加に貢献したのは、むしろ19世紀を通しての公衆衛生学の発達や、パストゥールなどによる細菌学上の発見であったと考えられている。

20) *Op.cit.* et dans l'édition Pléiade, t.XI, p.1761. あとの引用も同じ。

21) この一文はフュルヌ版『人間喜劇』では感嘆符で終わっているが、1829年の初版では疑問符が付されていた。この相違はなぜかプレイヤッド版には記されていない。